

『就実大学大学院教育学研究科紀要 2019（第4号）』 抜刷

就実大学大学院教育学研究科 2019年3月10日 発行

# 学部教職科目「教職論」授業実践の成果と課題

**Results and Tasks for Improving Undergraduate Teaching Subject  
'Theory of Teacher's Profession'**

渡 邊 言 美

## 学部教職科目「教職論」授業実践の成果と課題

渡邊言美

### Results and Tasks for Improving Undergraduate Teaching Subject 'Theory of Teacher's Profession'

Kotomi WATANABE

#### 抄録

筆者の「教職論」(「教師論」)(中等)8年間の実践を総括し、その成果と課題をふまえ、今後の他教職科目での実践への示唆を得ることを目的とする。本稿では特に教職課程初學者の受講生の教師像のイメージ、および教職への不安について検討した。授業実践の成果と課題もふまえ、今後初等・中等各領域の各種教職科目を担当していくに当たって「教職に関する科目」、特に講義系科目について充実させるべき点4点を指摘した。

キーワード：教職論 教員像 教職課程

#### はじめに

筆者は2011年度本学に着任以降、8年間に亘って「教職論」(2011年度～2015年度名称は「教師論」)を担当してきた。本稿では8年間の実践を総括し、その成果と課題をふまえ、今後の他教職科目での実践への示唆を得ることを目的とする。

この科目は1年次前期配当であり、4月上旬のガイダンスで説明と履修登録を行う。彼らには初めての教職科目となる。入学直後であり、進路観が明確でない学生も多いであろう1年次前期の時点では、教職イメージや教員の職務についての知識、自身の就業意欲等にはそれぞれにかなりの差があるものと思われる。

かれらが教職に関してどのようなイメージを持っているのかについての示唆を得て、1年次後期以降の教職課程でどのような取り組みや配慮が必要であるのか、手掛かりを得たい。特に本稿では「理想の教員像」「教職への不安」に着目して、学生アンケート結果をもとに考察する。

本稿は以下の構成からなる。

- 1：本学教職課程(中等)の概要
- 2：「教職論」(「教師論」(中等))8年間の授業実践の概要
- 3：学生アンケートから見る「理想の教師像」
- 4：学生アンケートから見る「教職への不安」と克服への取組

5：他大学実践からの示唆

6：授業実践の成果・反省点・課題、本学における教職課程改善への示唆

## 1 本学教職課程（中等）の概要

本学学部課程では、下記3種類の科目を開講しており、筆者担当分は中等課程として課程認定を受けた1、2の2科目である。（以上全て2018年度時点の状況）。

1. 教育学部教育心理学科生対象「教職論」（卒業必修。養護教諭・中学校高等学校「保健」教員・特別支援教員各一種免許状必修。特別支援学校教員免許志望者は小学校もしくは中学校「国語」「社会」「英語」高等学校「国語」「地歴」「英語」教員一種免許状のいずれかを取得する）教職課程をもともと履修せず、心理学や福祉関係の職を目指す学生も含む<sup>1</sup>。
2. 人文科学部生対象「教職論」（中学校「国語」「社会」「英語」高等学校「国語」「地歴」「英語」教員一種免許状必修）
3. 教育学部初等教育学科生対象「教職論」（卒業必修。幼稚園・小学校教員一種免許状必修）

2の人文科学部生対象の教職課程では、以下のハードルを設けて教職課程の質保証に努めてきた。

①教職課程を履修しようとする者は将来教員の職を志すものでなければならない（履修要覧）。教員を目指す意志のないものが安易に免許状取得のみのために履修することは認められない。

### ②教育実習参加資格

- ・教育実習の前年次終了までに「教職に関する科目」をすべて修得している
  - ・2年次終了時GPA値が2.00以上。3年次終了時2.00以上（できれば2.50以上）である。
- この規定は次年度の教職課程履修継続資格を示すものでもある。

まず2年次終了時点で、GPA値が2.00未満の学生は3年次以降の教職課程履修を認められない。3年次終了時には同じくGPA値が2.00未満の学生、および3年次までの配当の当該学校種・教科の「教職に関する科目」を1科目でも未修得の学生は4年次の教職課程履修を認められない。

その他注意事項として、教育実習（中学校中心、4年次6月頃）・事前事後指導（学内、1月～7月頃随時）等の期間は一般就職活動はできない。中学校・高等学校免許はセットで取得といった事項がある。

このようなハードルを乗り越えた学生のみが、4年次に教育実習参加を認められ、後期「教職実践演習」での総仕上げを経て教職課程を修了する。GPA規定は2010年度入学生から導入し、安易な教職課程履修を防ぐ効果が見込まれている。結果、2年終了時にはGPAの成績不足、3年次前期終了時には3年次前期の教職に関する科目を1科目でも落とした場合、3年後期終了時には3年間分の教職に関する科目を1科目でもとりこぼしがある場

合、また全科目単位取得済みでもGPAの成績不足、以上1つでも該当すれば、学部4年間での教職課程修了は不可能となる。例年数多くの学生がいずれかの段階で涙をのんでいる。

これらの取組がどの程度、教職課程の質保証へ有効であるかの検証はまだ行われていない。しかし筆者のあくまでの印象に基づけば、年々「なんとなく」「親に言われて」教職課程を履修する学生は減少傾向にあるように感じている。高等学校での進路指導が一層充実し、入学時点で進路目標がはっきりしていることの証左でもあるかもしれない。

## 2 「教職論」(「教師論」(中等)) 8年間の授業実践の概要

提示したのは主として2018年度の内容である。当初3年間は自作プリントを使用し、4年目以降は佐藤晴雄『教職概論—教師を目指す人のために—』各改訂版(学事出版)を使用した<sup>2</sup>。

1	講義概要・教師をめざす動機について 作文	9	教員の職階・学校経営体制
2	教職の意義	10	教員を巡る環境 小テスト
3	日本の教師像の歴史	11	教員の1日
4	教員養成の歴史	12	教員の多忙感・負担と解消策
5	教職員の配置	13	特別授業 ゲスト講師 教員生活と4年間の過ごし方
6	教員の身分と服務	14	教員採用試験の制度・傾向
7	教員の懲戒 体罰	15	総括・期末試験
8	教員の職務		

第1回 講義概要・教師をめざす動機について 作文・全15回の概要説明。自己PRシートの記入提出。自己PRシートは、成田喜一郎・長瀬拓也(『教師になるには』2006年版、一ツ橋書店)のp194「私のよさ、お伝えシート」を用いた<sup>3</sup>。

第2回 教職の意義 テキスト第1章 教員概念、教員に関する用語説明。教員という仕事の意義についての説明。

第3回 教職観と理想の教師像 テキスト第2章 近代日本の教師像の変遷について、陣内靖彦の論に基づき説明。戦後の教職観の変遷から見た理想の教師像の概説。現代の理想の教員像についてのアンケート結果。テレビドラマに見る教師像の変遷についての説明。2017年中央教育審議会答申に見る最新の教師像

第4回 教員養成の歴史 テキスト第3章 戦前戦後の教員養成制度の概説。

第5回 教職員の配置 テキスト第4章 教職員の種類と配置、身分と任用、教員免許更新制。新聞記事読解とコメント<sup>4</sup>。

第6回 教員の身分と服務 テキスト第4章 教員の服務。教員採用セミナー(2016, 3)

「肢別問題で深める教育法規」の「教職員の服務」問題演習

- 第7回 教員の懲戒 体罰 テキスト第4章 教員の分限・懲戒の内容、勤務条件
- 第8回 教員の職務 テキスト第5章 教員の法的役割、教員の仕事の特質と内容
- 第9回 教員の職階・学校経営体制 テキスト第6章 校長・副校長・教頭の職務、校務分掌について
- 第10回 教員を巡る環境 小テスト テキスト第7章 教員の年齢構成。NHK「クローズアップ現代」「求む若手教員 人材争奪戦・教育現場で何が」2007.7.24放送を視聴。方法内容をまとめ、感想を報告する。平成28年度学校教員統計調査データから、教員の年齢構成の特徴と課題を考える。教員の勤務時間、多忙感
- 第11回 教員の1日教員の勤務内容 人文科学部 NHK「あしたをつかめ 平成若者仕事図鑑 中学校・英語教師 Yes, you can! 君ならできる」(2009放送)を視聴。教育学部教育心理学科は例年、NHK「ドキュメント につぼんの現場 心に響け いのちの授業」(養護教諭山田泉先生、2008放送)を用いている。
- 第12回 教員の多忙感・負担と解消策 テキスト第7章 OECDのTALIS調査の結果説明、文部科学省の2017年4月公表全国調査結果を2006年結果と比較。文部大臣決定(2017)「学校における働き方改革に関する緊急対策」の紹介、「部活動指導員」制度の概説。新聞記事読解、コメント<sup>5</sup>
- 第13回 特別授業 ゲスト講師 教員生活と4年間の過ごし方(教職支援センター職員)
- 第14回 教員採用試験の制度・傾向 テキスト第10章 教員採用試験の制度、試験内容、と近年の採用倍率等の紹介。その年の岡山県、岡山市の最新教員採用試験問題(教職教養)のうち既習内容を解いて解説。
- 第15回 総括・期末試験 テキスト第8章 教員の資質向上と研修について概説。中教審答申の内容紹介。全体総括。総括では、「日本の労働人口の約49%が、技術的には人工知能等で代替可能になる」が「芸術、歴史学・考古学、哲学・神学など抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業、他者との協調や、他者の理解、説得、ネゴシエーション、サービス志向性が求められる職業は、人工知能等での代替は難しい」として、一例として各学校種の教員が示されたことを紹介し、教職の重要性について話した<sup>6</sup>。

### 3 学生アンケートから見る「理想の教師像」

以下の内容は、「岡山県が求める教員像」<sup>7</sup>に筆者が数字とアルファベットをふったものである。

- I 岡山県の教育課題を深く理解し、果敢に立ち向かうことのできる教員
- I A 本県の教育課題である学力向上や徳育、生徒指導に関する確かな指導力のある人
- I B 地域の教育資源の活用やキャリア教育により、学ぶ楽しさや学ぶ意味を伝える人
- II 強い使命感と情熱、高い倫理観、豊かな教育的愛情を持った教員

- Ⅱ A 本気で子どもたちと関わる中で、教員としての喜びや意義を見いだせる人
- Ⅱ B 子ども一人一人の良さを認めて、子どものやる気を引き出すことができる人
- Ⅲ 多様な経験を積む中で協働して課題解決に当たるなど、生涯にわたって学び続ける教員
- Ⅲ A 多様な経験や校内外での研鑽により、専門性やコミュニケーション能力を高める人
- Ⅲ B チームの一員として協働する中で、自ら行動するとともに他者にも働き掛け、必要に応じて支援しようとするリーダーシップを発揮して課題解決に当たることができる人

本稿では、4月第1回時点記載の学生アンケート（「私の良さお伝えシート」）で記入させた「理想の教師像」が、上記のどれに当てはまるかを検討した。その上で教職履修学生の考える理想像と、採用先（行政）の考える理想像のずれをどう埋めていくべきかの材料としたい。集計した結果は以下の通りである。

I A 人文31件、心理11件

例 分かりやすい授業が出来る、家庭教師の先生のように生徒に有益な情報を渡せる

I B 人文心理共に0件

Ⅱ A（前半） 人文1件、心理1件、子どもたちに全力でぶつかっていける 相談に自分のことのように向き合っていく

Ⅱ B 人文4件、心理2件

例 良いところをちゃんと見つけてあげられる、生徒の長所を伸ばし、短所を長所に出るようなアドバイスが出来る

Ⅲ A 人文心理共に0件

Ⅲ B 人文3件 心理5件

例 非常時にちゃんと対応ができる、一緒に働く大人や子ども、保護者など、様々な立場から物事を考えて、その物事に対して適切な行動をとることができる

その他、Ⅲ全体に関わる意見 心理2件 例

圧倒的に多かったのはこれらの分類に当てはまらない、あえて当てはめるなら広くⅡの人間性に関する事項であった。（人文89件、心理174件）

例・生徒から信頼される教師・よく笑う教師・親しみやすい教師・生徒が何でも相談したいと思えるような教師・ダメなことはダメといえる、褒め上手・理想を持ち続ける・人とのつながりを大切にする

他には、自分の中学校・高校時代の先生（●●先生）のような教員と述べたのが人文7件心理1件あった。

特徴の1点目は、岡山県の示す教員像があくまで「教える側」の教員、また県の教育課題を解決するという行政の立場から見た理想像であることに対して、本アンケートで示された理想の教師像は、多くが児童生徒（これまでの自分や友人）にとっての良き教員像であることである。Ⅱ A前半の「本気で子どもたちと関わる」、つまり児童生徒（これまで

の自分や友人)に本気で関わってくれる教員像に近い、広くⅡの人間性重視の教員像を提示する学生が圧倒的多数である。同時にこれは、教員評価制度のもとで可視化されにくい資質でもある。

ⅡAのように教員自身が「教員としての喜びや意義を見いだせる人」であるべきという視点は、これまで「学ぶ側」であった学生にはない。ついでⅠAのような授業や生徒指導の能力が示される。ⅢAのように教員自身の研鑽が、ⅢBのようにチームで対応して臨機応変に課題解決する力をあげた学生はごく少数である。

これは授業中に提示した先行研究のアンケート結果と重なっている。中高生が理想の先生像として掲げた1位は「気楽に話せる」2位は「授業が分かりやすい」3位は「ユーモアがある」、4位は「どの生徒にも公平に接する」である<sup>8</sup>。

2点目は、理想的教員像のモデルはおそらく書物やメディア報道よりも、自らの学校教育の経験(自分のクラスや教科担任等)に基づいていると推測されることである。本アンケートのみならず、8年間の実践を通じて受講生のべ数百名の諸提出物や発言から、良い、逆に悪い教員のモデルについて、漫画やドラマ、映画の登場人物がまず表れることはなかった。また研究書など各種文献にみる教師像が引用されたこともない。逆に過重労働等、マスコミ報道にみる、社会での教員のマイナスイメージについても、ほぼ学生からの紹介の声が出なかったのは正直意外であった。もし学生が報道を知らず、それだけ社会の動きに関心が少ないのだとすれば不安を覚える。

現場で児童生徒の心理を理解し、かれらから信頼され、親近感を持たれる存在になることは教員として重要な資質である。よくうたわれる教員の資質に「不易と流行」という文言があるが、その「不易」の側面については、ある程度学生は経験的に把握している。また自らの経験から優れた教育実践に(あるいは反面教師に)学ぶことも有意義であり、教員を志す大きな動機付けとなりうる。しかし現在、それだけではなく採用先、また校長はじめ同僚、地域や保護者からも支持され信頼される、時代の変化に応じて教育課題に立ち向かい、学び続ける教員を養成することが求められる状況にある。また最新の中央教育審議会答申や文部科学省、自治体の教育施策、赴任校の現行方針や生徒指導上の問題等に即して、望ましい教員として振る舞うことが求められる。

教職課程において、「学ぶ側」であった学生に、いかに「教える側」の立場に立って考え、「流行」の部分も含め多面的に力量形成させていくかが大きな課題となることが明らかになった。

中央教育審議会答申(2015)で、学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築のための体制整備について示された。ここで求められた教師像は、きわめて多様な資質能力を、養成・採用・研修の一体的改革のもと身に付ける者である<sup>9</sup>。

- これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有

機能的に結びつけ構造化する力。

- アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量。
- 「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力

#### 4 学生アンケートから見る「教職への不安」と克服への取組

次に紹介するのは、第13回の特別授業へのコメントである。これは特に質問項目とはせず、自主的に記入したものであるため、実際に不安を抱いている学生はもっと多数である可能性がある。特に人文科学部学生の場合、教員という仕事への不安に加え、教職履修そのものの継続への不安が大きいと考えられるため、検討事項とした。

##### \*教員という仕事への不安、迷い

###### ・自分の適性や教員の仕事の過酷さへの不安

例・正直、教職の授業を受講して自分が思っている以上に大変で厳しい事が分かり、自分には向いていないのかなと思ったりしたことがあった。

・私は教員になるべきか正直今はとても迷っています。教職課程を履修しはじめた4月は「教員になりたい！」とまっすぐに思っていました、今まで約3ヶ月勉強してきて、「私のこの人間性でなれるのだろうか？」とか「向いていないかもしれない」と思うようになりました。

・正直まだ教員を目指すべきか悩んでいます。中途半端な気持ちで授業を学んでいいのか最近まで迷っていました。

###### ・教員になる意志はあるものの、採用率から不安がある

例・私は将来、教員になりたいと思っています。中学の時に友人がはじめを受け、不登校になってしまったことがきっかけです。ずっと「教員になりたい！」と思っていたのに、最近揺らいでいました。地元の平成30年度の志望学校種の倍率が〇倍というのを見たり、ネットでいろんな情報を見たりしてから「諦めた方がいいのか」と思い始めていました。

###### ・教員採用試験への不安

例・今回の授業を受けて考えたことは、就実大学生でも3割が教員になれるのかということだ。私は正直もっと低い確率だと思っていたので少し希望が出てきた。

###### ・教員への適性への不安

例・「求められる教員像」を目指して、求められる姿を大学4年間で形にしないといけない。また、教員の過剰労働が問題となっている今、「なんで私は教員を目指しているのだろう」と実はとても悩んでいました。

・同じものを目指している先輩たちのお話や、教育採用のお話を聞くと自分には向いて



いないかもしれないと不安になります。それと同時に今回聞いた内容のように教育という立場から子どもと得られる喜びを私も感じたいと思っています。

#### ・他業種

例・私も将来何の職業に就くか決まっておらず、あまり自分の将来について前向きに考えることもできず、絶対に教師にならなくてはならないのかなどと皆との将来に対しての考え方の違いから自分を情けなく思いました。

・私は今、教員の道に進むか他の仕事に就くか迷っています。(略) 入学してみると周りには自分の夢をはっきり持った人ばかりで、(略) 間違いだったのではないかと悩むときもありました。

#### \*教職課程履修への不安、迷い

例・私は(略)勉強についていけないことが、今とても不安でした

・模擬試験の結果がわるかったりしたことや、教職の小テストでも失敗してしまったことがあり、自分は教師にむいていないんじゃないか、教師になれないのではないかと考えてしまい、教師になることをあきらめようとしていました。

・勉強して行く中で、私が思っていた以上に教員はやることが多く大変で、教員になることも本当に難しいんだと分かり、1年生ながら、すでに心が折れそうでした。

**不安の克服** 毎年実施しているのは、小中学校の校長経験者にお越しいただき、教職の魅力について語っていただく特別授業である。2018年度に特別授業を行って下さったのは教育学部外の学部から一般企業に就職後、教職を志し採用試験に合格して公立中学校教員になり、校長を務めた方である。教職の素晴らしさについて様々なエピソードをもとに学生に語っていただいた。真摯で厚厚なお人柄が学生にも大いに伝わる内容であった。

以下、コメント中の「先生」はこの講師を指す。ほぼ全員が、肯定的なコメントを記入し、教職への前向きな姿勢を示した。

例・「中学校が最後の母校になる子供もいる」という言葉には「義務教育の重み」があって、自分は〇〇の免許を取りたいと思っているのでとても感慨深かった。同級生や後輩にも中学校が最終学歴で働いている子もいるがその子たちは自分からその道を選んで進んだので後悔はしていないと言っていた。しかし現代は社会の風潮的に学歴を見て判断されることが多い。だからその子たちがそう言った風潮に負けないようにするためにも学歴はもちろん、常識などもきちんと教えていかないといけないと思った。

・先生は先生自身が高校時代に数Ⅱが分からなかったからこそわからない子供の気持ちがあった。とおっしゃっていて自分の文系ではあったが高校の数Ⅰ・Ⅱが分からなくて苦戦していたのを思い出した。高校のときの先生がおっしゃっていた言葉で「俺の授業でわからんところがあつたら他の学年でもええから教えてもらって分かるよになれ。」という言葉があった。自分にはどの先生の説明の仕方が合っているかわからないからどんどん色々な先生に聞きに行つて学びなさいということだった。自分が

教師になれるかはわからないし、なれたとして自分の考え方が誰かに向いているかはわからないけれど、誰か一人のためにでもなれるように今頑張って学ぼうと思った。

- ・先生のお話を聞いて、自分の努力しだいで、がんばれるのではないかと感じました。今、私はなにも努力をしていません。少しでも子どもたちと交流するために、積極的に参加したり、教職模試を受けたものの、ボロボロの結果になってしまったので、次回は少しでも良い結果を残せるように、この夏はボランティアと教職模試のための勉強の二つをとりくんでいこうと思います。
- ・先生の教員時代のお話を聞いて、やはり教員は素晴らしい職業であると感じ、教員になりたいという気持ちが強まりました。特に「だまされてもそのこの話を信じる」「全てを受け入れる」という言葉に胸を打たれました。

以上一部の声を挙げたが、今回の特別授業は教育学部外から一般企業を経て教員を目指した経緯や、お人柄、生徒への関わり等、学生が感銘を受け、学生の不安の多くに答えて頂く内容になった。これからも他科目で同様の特別授業を取り入れたい。

教員採用試験そのもの（合格できるかどうか）についての不安も払拭していきたい。本学教職課程では、年々教員採用試験に着実に合格実績を上げ続けている。今年度小学校は初等教育学科4年生の受験生24名中18名最終合格、他に小学校教員資格認定試験に合格して中高免許と併有予定で、小学校採用試験に最終合格した人文科学部生もいる。中等では人文科学部表現文化学科4年生が中学校国語7名受験中5名最終合格など、全国の倍率に比しても、非常に高い成果を誇る（いずれも数字は実数）。これらの実績を周知して、学生の入学段階の学力的な不安の声にも向き合い、払拭していく取組が必要である。

## 5 他大学実践からの示唆

### ①授業方法の工夫

- ・大和真希子・榊原禎宏（2003）「教職専門科目における学習先行型の授業の試み―「現代教職論」を事例として―」山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター『教育実践学研究』8

大和・榊原は、教授よりも先に学習させる教職専門科目での授業が①知るべき・理解すべきことについて、予め用意された型や枠にしたがい到達させることで学生に成就感をもたらし、教員養成に不可欠な被教育主体から教育主体への転換を促進する②資料を媒介に複数の解釈を引き出すことで、学生間、学生-教員間のコミュニケーションを活性化できること、伝達に限らない対話を重視した授業モデルの提示することで、実践的力量的基礎を形成させる、と主張している。

- ・湯地宏樹・阪根健二（2018）『「教職論」における授業形態と学生の授業参加度との関係』『鳴門教育大学授業実践研究：学部・大学院の授業改善をめざして』17

湯地・阪根は、授業によって、その都度、学生の授業参加度が変化することが確認されたこと、総じてビデオ中心型授業における授業参加度の得点が高かったこと、能動的

学修だからといって、授業参加度は必ずしも高くないことを明らかにした。

- ・小林清太郎・橋本拓治・高旗浩志・稲田修一・三島知剛・曾田佳代子・江木英二（2017）「全学教職課程における「教職論」の取組：学習内容の確実な定着と教師としての実践的な資質・能力の育成を目指して」『岡山大学教師教育開発センター紀要』7

小林らは、学生アンケートでこの授業に94%の受講生が肯定的な評価を行ったことの要因に「ワークシートの活用やペア学習・グループ学習、課題レポート発表会の実施など、アクティブ・ラーニング」をあげた。

- ・大石正廣（2017）「アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業づくりに関する研究—「教職論」の授業考察を通して—」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇』6

大石は、アクティブ・ラーニングの必要性と方法、学習効果について検討した。教職の職務内容を知識として覚える姿勢が多く、学修者にみられたこと、しかし「教職の仕事の大変さ、良さ」について意見を交流するという課題を与えられることにより、職務内容を検討するという立場に立つことで、自ら得た知識について深く考える学びへと進むことができていたと指摘した。

上記4つの論考から得られたことは、アクティブ・ラーニング等の学生主体の学びの導入が一定の効果を示すことである。これらの手法にまなび、今後の実践に活かしたい。

## ②学生の教職観

- ・中西仁（2015）「『教職概論』における教職課程入門の試み：学校・教職の現状を語ることを通して」『同志社大学教職課程年報』（4）

中西は「教職概論」で教師・学校・生徒の現状に則した11のトピックスを紹介し、「教職への理解」「教職とは何かについての考察」を進めるという試みを行った。「教職概論」は「教職」についての一般的知識を習得する為の科目であるが、一方で「教職」という一つの特徴的な職業について科目担当者が自分なりの認識や見解を語り、それを持って受講生に熟考を迫る科目でもあるとの見解を示している<sup>10</sup>。

- ・國原幸一朗（2017）a 「『教職論』における受講生の教師像と教職観」『名古屋学院大学教職センター年報』（1）

國原は、「受講生の学びの動機づけとなる「教職論」における受講生の教師像と教職観を多面的・多角的に捉え、その変化をみておく必要性」があると指摘した。教職論授業で用いたコメント・ワークシートの受講生の記述を通して、教職像と教職観を明らかにした。受講生は「熱意があり、生徒のことをよく理解し、授業も分かりやすく、しっかり指導でき、生徒の相談によく乗れる」教師を目指しているが、学校現場の教員に対しては組織や人間関係に苦勞している姿をイメージしていることを示した。授業では具体的な指導場面を設定して教員の役割や職責を理解させ、それを通して自分が目指す教師像をもたせ、自己の資質と能力を高めていこうとする意欲を持たせることができたとしている。

- ・國原幸一朗 b (2017)「教員生活で想定される課題と解決方法を考えさせる授業：「教職論」における教職キャリアプランニングを中心として」『名古屋学院大学論集』社会科学篇 54 (2)

國原は、新採時・10年後・20年後の教員生活で想定される課題とその解決方法をワークシートに記述させ、その内容を類型化し、ライフステージ毎の課題とリスクを図に示した。教員養成段階では、学生は大学での学びは教員免許状取得の為に行う意識が強く、「教職論で教員としての意識を高める必要がある」と指摘した。受講生は課題の解決法として「時間をかけて知識や技能を習得し成長していけばよい」「同僚教員に教えてもらえばよい」と考えていることを明らかにした。採用試験の段階で「実践的指導力」が求められること、中堅教員は若手教員の指導、企画立案、事務処理のできる資質能力が求められているが、習得は教員養成段階からはじめ、「学び続ける教師」でなければ獲得できないこと等、個々の資質能力の基礎を大学で培う可能性に気づかせる必要があると指摘している。

- ・山崎明宏 (2012)「公立学校教員の職責理解を促す「教職概論」の授業実践に関する研究」『プール学院大学研究紀要』第53号

山崎は授業を「学生が学校現場をイメージし、教員の職責、役割を考え、教職に関する使命感や情熱を持ち、自己の資質能力を高めようとする意欲を持つことができるよう」展開した結果、一人一人の気付きや今後への意欲には差が見られるものの「教員に求められる資質能力の理解」という点では一定の成果があったという。

以上いずれも参考になる点が多くあった。特に、現場教員経験を持つ筆者が教職体験を題材にしたり<sup>11</sup>、学生に学校現場の教員を想起させながら自己の教員生活を予想して、中年期の課題を考えさせたりする取組<sup>12</sup>、小学校事例であるが「ある教員の一日についての協議、教員に必要な資質・能力」についての協議・「6年2組での出来事」といった学校現場のイメージづくり、ケーススタディの取組<sup>13</sup>、は効果的であると考えられる。

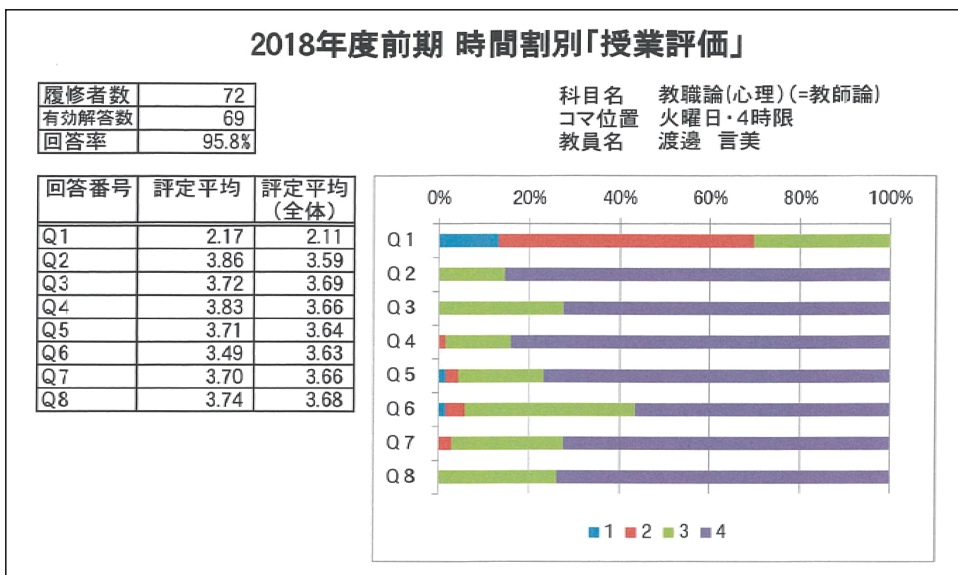
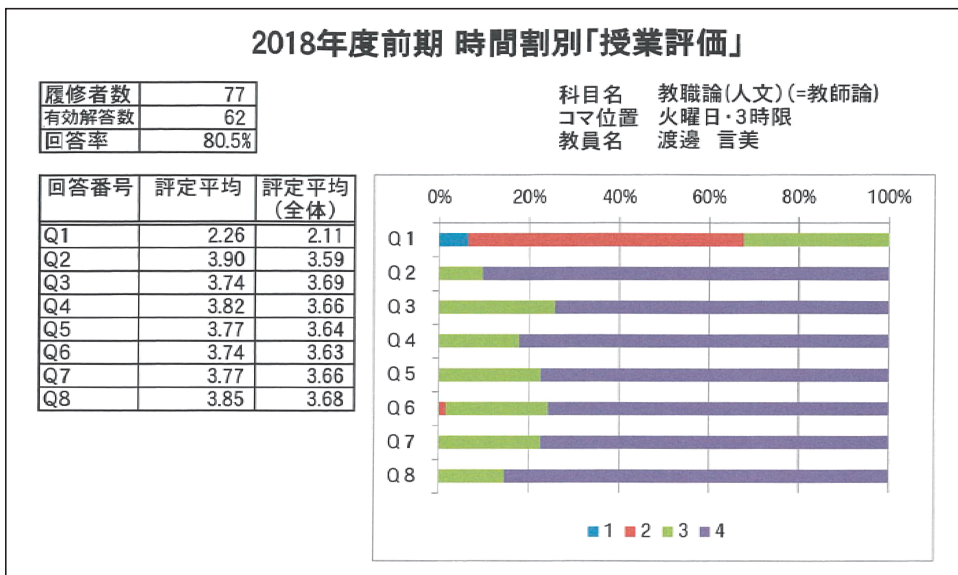
## 6 授業実践の成果・反省点・課題、本学における教職課程改善への示唆

筆者は8年間の「教職論」(教師論)授業実践において、学生が教員として必要不可欠な基本知識、教員を巡る現代的な課題や改善策の紹介、教員採用試験教職教養過去問の分析や予想問題等、学生に可能な限り情報提供を行ったつもりである。

下に挙げるのは2018年度前期のアンケート結果である。Q2～8は「4」が最高評価である。

- Q1 あなたはこの授業の予習・復習・課題提出などをどのくらいしましたか。週平均時間で答えてください。
- Q2 あなたはこの授業に対して関係ないスマホ操作や私語をせず、主体的かつ熱心に取り組んだと思いますか。
- Q3 授業内容は、教員が示す授業計画(シラバスなど)に沿って行われましたか。

- Q 4 教材（印刷資料・板書・視聴覚資料・eラーニング・課題など）は、有効かつ適切だったと思いますか。
- Q 5 授業の手法・進め方は、有効かつ適切だったと思いますか。
- Q 6 授業内容に興味や関心をもつことができ、理解できるものでしたか。
- Q 7 この授業を受講したことで、授業内容に関する知識や技能などが向上したと思いますか。
- Q 8 この授業を通して、上記の間3～7を含めて総合的にどのように評価しますか



おおむね高評価であり安堵している。学生からの自由記述コメントは、匿名アンケートで最終評価に反映されないゆえ、時には辛辣な意見も出ることがあるが、今年度の本授業については好意的な意見ばかりであった。

## 内容

- ・採用試験について詳しく教えて下さったのが良かったです。
- ・教師になれるようがんばろうと思えました。
- ・採用試験をしっかり意識して授業に取り組むことが出来る
- ・授業内容に関する新聞記事を配ったり採用試験の問題をたまに出して下さったりすることで意欲が高まってとても良いです。
- ・教科書やプリントだけでなく、タイムリーな話題も一緒に教えて下さるので、イメージがわきやすかったです。

## 授業方法

- ・授業の内容・要点をパワーポイントで簡潔にまとめてあったのでわかりやすかった。
- ・レジュメのスライドが見やすく、メモもしやすい余白だった。
- ・はきはきとして声が聞き取りやすかった
- ・他の講義よりも緊張感があってよかった

反省点は、①アクティブ・ラーニングの導入が不十分であった点。クイズ形式の作業や自発的な発言は促したが、習得して欲しい事項が膨大で、駆け足に講義をするという展開に終始したこと。②教育実習以外に現場経験のない筆者が十分に教職の魅力を伝えきれなかったこと。③人文科学部の受講生は学部1年前期という、「とりあえず教職履修」と受講した学生がいると考えられる時期にある。教職を巡る現代的課題を取り上げたことで、教職の過酷さばかりが強ク印象づけられ、マイナスイメージを植え付けてしまった可能性があることがあげられる。一方で、安易な気持ちでの履修を防ぐために、「覚悟」を決めるために現状を知る科目でもあるという思いもあり、悩ましい。

筆者は教員免許法改正による新カリキュラム導入を受け、2019年度以降は「教職論」担当をはずれることになった(2018年12月時点)。しかし継続して初等・中等各領域の各種教職科目を担当していくに当たり、今回の検討から導き出した「教職に関する科目」、特に講義系科目について充実させるべき点は以下の4点である。

- ①予習復習や課題など、授業外学修を充実させる取組
- ②現職経験者や卒業生・採用試験合格者による特別授業を実施して、教職の魅力を伝え、不安解消をすることは有効であると考えられるため、充実させたい。例えば1年次後期の筆者担当中等「教育学概論」(「教職論」とほぼ受講生が同一)では、例年4年生の現役合格者を招いて体験談を披露してもらっている。受講生は大いに刺激を受けるようで、反応も大きい。教職への不安を払拭し、「自分でもやれる」との思いをもってもらう効果がある。
- ③読解力や批判的思考力等の汎用的能力を高める。新学習指導要領で児童生徒に定着を目

指す「資質・能力」の基盤となる力を、教員となる学生自身に付けさせる。新学習指導要領の内容も折に触れて取り上げていくべきである。

- ④中教審答申等の教育施策や、教育問題、教員の労働環境など、最新の社会情勢に関する情報提供を行うのみならず、学生自身が社会の動きに関心を持つような働きかけを行う。さらに全学挙げての教職課程の充実と支援体制については、以下の取組の推進が必要である。特に中等課程学生は実践的能力を高めたり、現場体験の機会が初等課程学生に比べて少ない傾向にあるように思われるため、特に充実させることが重要となる。

- ・教職支援センターとの連携のもと、採用試験対策を充実させる。卒業生支援にさらに力を入れる。
- ・学生の実践的指導力と専門性を高め、授業力の定着をはかる。模擬授業の機会を増やす。
- ・学内におけるインターンシップ等の実習系科目の充実。同時に学外でのボランティア、アルバイト等の現場経験を充実させるための各種取組

学生の教職課程履修継続および質保証のためには、教職の魅力をアピールし、意欲のある学生が履修を継続できるよう働きかけていくことが重要となる。諸所の情報提供を充実させて教員採用試験や教職生活への不安を軽減し、意欲を高める取り組みを行ってきたい。

## 引用文献

- <sup>1</sup> 本学中等課程（中高国語・英語・社会・保健、養護教諭）では、今年度教員採用試験において 教育学部教育心理学科学生は、養護教諭（+中高保健）、中高（国語・英語・社会）および特別支援学校、小学校および特別支援学校、の3通りの教職課程履修のパターンがある。本稿では前2者を「中等」として扱った。彼らは教職に関する科目多数は中等課程を履修するが、うち小学校及び特支履修者は初等教育学科の初等教育関係の専門科目を多数履修し、実習指導等も初等教育学科生と同一履修のため省いている。
- <sup>2</sup> 2018年度使用したのは第4次改訂版（2015）。
- <sup>3</sup> 成田喜一郎・長瀬拓也（『教師になるには』2006年版、一ツ橋書店）、p194
- <sup>4</sup> 茨城新聞「教員免許失効 新旧更新に違い」2017.1.19付け
- <sup>5</sup> 山陽新聞「県教委が初の働き方改革プラン 教職員残業25%削減」2017.4.15付け、山陽新聞「新・地域考 教員負担減へ部活改革 岡山県内の中学校から」2017.11.5付け、朝日新聞「部活動どう休む 手探り」2018.7.1付け等の新聞記事を使用。
- <sup>6</sup> 野村総合研究所「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に」2015、[https://www.nri.com/jp/news/2015/151202\\_1.aspx](https://www.nri.com/jp/news/2015/151202_1.aspx)、2018.7.閲覧
- <sup>7</sup> 岡山県教育庁教職員課HP、2018.12閲覧
- <sup>8</sup> 2005年3月23日 中央教育審議会義務教育特別部会レジュメ（尾木直樹）資料4「あるべき教師像と教員の質の向上について―「子どもの目線」で考える―」で引用されたアンケート結果。（NHK「少年少女プロジェクト」世論調査（2000年2月18日放送）中・

高生796人、保護者788人、校長860人より回収)

<sup>9</sup> 中央教育審議会答申（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（要約版）、2. これからの時代の教員に求められる資質能力」。

<sup>10</sup> 中西（2015）は、「教職課程導入期の学生にとっての「教職への理解」とは、主として教師・学校・生徒の現状を、学生が慣れ親しんだ「生徒」や「マスコミ」の視点ではなく、現場教師の視点から捉え直すことによってなされるものである」と主張する。筆者は経験的に、学生にとって「マスコミ」の視点はあまり慣れ親しんだものとは言えないのではないかと感じている。また現場教師の視点もむろん貴重であり重要であるが、養成機関である大学は、厳しい課程認定審査のもと教職課程を運用している。学術研究の成果に基づいた授業づくりを行うことが求められることも忘れてはならない。大学の研究者と現場教師経験者との協同体制が必要である。

<sup>11</sup> 國原2017a。

<sup>12</sup> 國原2017b。

<sup>13</sup> 山崎2012。

#### 【附記】

本報告での学生記述内容、授業評価アンケートについては、各学科受講生に趣旨を説明の上、掲載引用の承諾を得た。引用内容については、個人情報（所属学科、引用された先生の名前、出身校や学科、地域等）や受講生の取得希望学校種・教科名はすべて伏せた。